



門 遠 13  
號 879  
卷 4



碗久 柳巷 話説卷之四

東都

曲亭

主人

編次

明治三二年  
十月十日  
購

碗久の長堀の危きを脱してや益婆が家に走り着させ松山に  
 向ひ女の童答て彼君ハ甲夜より内身と待ひてお母が根引  
 の財主の末のいと因えしうぐひらけりも出口まで行ひぬ飯  
 のふれもわらう。あつてふ坐せとて客房に隣り子舎に伴  
 ひて鉢子盃小肴上死経よりそをてとて来つ燈を外へ澳らと  
 ぞろ屏風立撓らとて出ゆたり年ハまじ三五ふも満ちまじと  
 廓に生育バのづら間夫さうく潜する段中のかまひ

公山卷之四

たりうて碗久ハ燈火ふさし粉ひましうこ行すを思ひあふ  
 春の夜も短くて二更の太鼓由りさる程小松山ハ入り  
 来ずもさるくふ思ひぬ人を伴ひく客房に飯とすも燕婆ハ  
 の女の童とともふ彼賊主ハ給侍して盃と拳酌を取つてさるに  
 わらで高く笑ひ愛とくらぬもさる信くしげ小管待ハ客  
 人退し燕婆とさるく又小松山ハ出て門出もさる翼の文  
 ぶと定めし頃日暮さる歌妓或ハ女童等ハ像見とさせ  
 ちやとさひさめて来るハ花街の名残も今宵一夜さる小物  
 ちやハさるをば天地乾坤渾沌未分ハいごさる進雄ハ八の

瓶子ハ味酒を醸して山田の大蛇と殺しあひしより美ごと死酒ハ多  
 くまで三盃飲し觴も君と酌とと酔もすは節曲もさるさ  
 疲倦し幼様牙鼓戯ハちどけも君ハ爪音とせせさるこれ  
 ます看ハあらしささるしとせせせども松山ハ目今飯り来つて  
 死女童ハ耳語て碗久と子舎小溜ハあねと告げ身ハさる  
 わらでさるハ其呼あらしとさるさるさるさるさるさるさる  
 の形勢とさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 女子の情も人の心を和らる糸竹もさるさるさるさるさる  
 けん琴とさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 玉琴もさるさるの瀧とさるさるさるさるさるさるさるさる

彌の襖も山鳥のむろの初尾の鏡もらで声さく曇る春の月ゆる  
ひや庭の末の松峯上の風の吹くひ憂をましらも告よとて

すゑの松山浪こそとせもうらまらぬこの松が枝も君がら春のうらり  
る死汀の池も亀あそぶ

身にまゝりて秋のころ月も隈もたわやの戸にうらと告よとて  
うけゆるくぞうらめしき

さうとひ出せる潮も紋も去年のその夜ととひ出る唱歌ふとらと箆  
しうが碗久ととととのととて千代と契つて一音妹子が池の汀も梅が  
亀の浮くる窓もあらざと有馬の温泉沸くる胸くるくも思  
ゆも。

中々に今いふ思ひ送るとむろのと人づてあらたけらうと  
あつらひつづるもたつていふ  
つとらたのいの命も逢ぐらぶらうらまひののぶらもいふ  
まうと。

あつらひ山くむらも道の道もづみ人のとらうのむらもむらも  
かみせんころとひ

小夜千鳥夜もすがらうらむらととよからん須磨のすまも  
の物うきふ涙とととらうと

声くに蒼る少女亦が散動く奥を催せば碗久耳を側てく  
又うら文のわりなるものと今人目を憚つる関の戸も用ならぬ

國の屏風小掛くわげ一り一衣の苗奇南なまなのうらうらふとあはれた人のころと  
あつとあつと

ちたりのまる送くわて袖そでをまきとりつゝ末のまる山浪越やまなみささるいりふ

ゆひをえあてあまのうらうら

どういひ果はまはは盃はもも敷敷そふそふ土圭更とけい更更園園うらうらささららづづ睡ねららししままららせ

てててて蕪わ婆ばままのの女にのの童ににに盃盃盤盤ををささらら運運ばば一一松松山山ををいいととがが一一ままと

客きやくとと取と房ふにに誘よひひししおおののがが塘たにへへととくくゆゆぬぬ松松山山のの席せきのの果はつつを

選えらべべしし思おもひひににぞぞ取と房ふへへいいままししままららずず小こ棲せとと寒かくく子こ舎しゃのの襖あはせと

ひひそそののににいいののここままづづ裡うちよりよりももそそままとととと曉さとつつてて襖あはせ遣やるる屏びやうぶ風ふうふ

移うつりり入いるるとと膝ひざふふ携たづなつつててよよくくとと泣な涙なみだもも水みづもも漏こぼれれとと契ちぎつつてて誠まことに

あらしあらしいいままししううららううるる折をりりもも隣となり坐ま交まのの庭にわのの木きのの間まをを焼やけけ出でてて椽えん先さき  
近くちかく潜ひそままるるものものありありううららとと死し松しょう山さんがが客きやく取と房ふををおおくくそのその人ひとを  
招まねききよようう一いっ点てん涙なみだののここゆゆくく音ねももせせどどののろろももにに子こ舎しゃのの襖あはせのの襖あはせ  
耳みみととよよくく著つけけるるのの容ゆる子すをを竊ひそ聞かててままももちちりりががししてて碗わん久くハハ松しょう山さんが  
背せををくくのの拊ふ頃ころ日ひ内うちカカががげげづづくく殊ことごと更さら今いま宵よのの首くび尾びああししとと彼かの  
田た舎しゃ人ひとががららげげゆゆももここまま白しろハハるる菟う真まとと外ほか小こ波なみささくく腹はらををくく  
多おほくく酒さけももああややゆゆくく醉よめでで胸むねのの痛いたみみももいいとと本ほん意いままげげの  
聞きゆゆままハハ松しょう山さんのの泣なききもも智ち恵えもも器はかり量りやうもも身み帯おびももままるるああハ  
雪ゆきととままりりああももここららがが身み故こままととそそひひもも涙なみだずず根ね引ひののりりもも定さだままるる  
嬰あやハハ身み價あてをを遍あまふふすすとと壁かべハハ門かど出でとと死し出でのの旅たびづづららとと覚おぼ期き究きゆうててははまま

二 公山卷之四



傾城  
 傾國

四

ども有身て五月に八人の形貌も成とひつゝまのく八月あるが。
 たましく病せし君が胤をたもる死母のむめて日の光もみせず塞
 の河原の童頭計小入るくを。むへ命もせしままで迷ひなれぬ
 父の雲とち居つ待たつて小運つりつらうくまてまを。あつて憐
 むひえん。びづりうと死せまば碗久声を低うしてその恨ハ理つ
 るがら金調んとすもろく。あつてあまる身の憂ハるそり顔
 月をも猜くの人あつる小今ての養母ハ原が乳母あつてうくまの
 庇と稟し人をもびその舊恩を復さんとて今宵猛小一衆の金
 をち出し。こまどめて松山が身價をこまへせしうとぞ思ひも
 うけど恵もひしむとにその金を懐中て長堀まで來つる死

悪棍小跟らして既小金を奪ひひまらまんとてうく小路ゆく人の情
 しく危難を脱し喘くく小到つてが。あひの外小時も後とぬこことん
 めんとく項ふりけし。賤布の内よりち出す金小塵りぬ。控女もあつ
 荒ぶうち笑く外面をちかぎ。廓がむひする子と追も出すが世の中
 の親のあらひと愛はるに退く小退まぬ妹脊の山のあらわとてよりい
 弥高き母夜の恩ゆとけつとてう。彼客ハ翌日契つとていま。身價を違
 ちぶること幸もまどく。家刀自に談合してとの金と違ちてい。
 方ハ木仏もつるく。とて門の柳の系もらと。魔く小たをたつて。
 小世つて人の習俗も。數ハいつたりり。あり侍らねど。
 見え侍り。まらひまら。あはく。家刀自小告るんといひ。ひりけて立ん。





諭こととて倦あれ別ことを生きことする悲ことにいはるるらめ後世ことを人の  
 大事こととて身ことと先ことに殺ことしてとく死こと口説ことつこときり出す母ことの像見こと  
 仁田山こと油こと膚こと放ことさねば人こともことんぬ護身こと囊こともこといとせと故郷こと子安こと  
 觀世こと言ことうことが遠ことくことらぬ臨月こと小安こと産ことせことせぬ人こととて子故こと祈ことつこと  
 現在の願ことも今ことい又こと来世こととことのことなる果敢ことることのことハ生死こと  
 又ことは又ことは身ことが父上ことの納聘こととて書こと字ことめことくことのことりこと短冊ことも讀こと  
 又ことは妹ことと夫ことの縁こと短こときことにこととことのことまことくこととことのこと朽木こと形こと  
 辞世ことの哥ことも經木ことも思ことくことまことらことふこととことのことはことも決こと小  
 死ことまで護身こと囊こととことのこともこと小懸ことること草ことの追出こと  
 ることまで袂ことのこととこと露ことけことくことることもこととことのこと碗こと久こと臉こととこととこととこと死

身ことハ一言ことの信ことを守ことつこととてこととことのこと由こと多ことふこと千万ことの苦辛ことをこと稟こととことまこともこと又  
 亡父ことの志ことと果ことせんこととて家こととことうことること身こととこと亡ことすこと加梅こと下こととことのことハ父こと  
 寛柱こととことのこと解こととこと汚名こととこと雪ことんとこと思ことひことてこともこととことのこと至ことつこととこと萬事こと休  
 せりこととこともこと故郷こととこと出ことしことより田井こと八太郎ことが生死こともこととことらことちこと日陰ことの花こと  
 岡こともことからことてこと周ことひことふこととことまこときこと身ことの果こととこととこと竭ことぬことうことらことぬこと姑婦ことがこと死こと言こと大こと今  
 もこと黄縁こととことうこと障礙こととことることせことにことや物ことの道理こともこととことたこととこととこと丈夫ことの  
 ハ似ことげことること多ことくこともことわことらことぬこと金こともこと多ことふこと死ことんことと思ことひこと定ことめことつことること迷ことのことハこといこと  
 哀ことまことりこと松山こともこと目こととこと押拭ことひこととこと身こともこと又こといとこと稚ことくてこと母ことにこととこととこととことその  
 面影こともことあことらことけことらことること此こと世ことやこと在ことすことらんこと死こと人ことあことやことることのことハこといこと  
 今こと百こと七こと心こととこととことハこと冥土ことゆことくこと環會ことはことることもこと名告ことらことくこと他ことの過ことをことせん

深き岩の堀江の水は渡る橋をきとらざとと泣声あがの袖の上  
遠き寺の鐘音づみて俵まばちや七ツろり六の街の或る身と救  
ひゆ人と念佛しぞくくこととそがせ碗久もひよひてはと思ひ  
氷まき短刀を引抜て雪まぐりま松山が胸のあつりと刺んき折  
あまゆと蒸波まの松山が彼客をひとり睡らうとさうとひそ  
う小起出彼是と索る小子合ゆと碗久と物くららめまゆとて  
大の焦燥わらう小蒸襖を押困きつて入て来まば裡の慌忙  
て碗久のゆるる又と鞋の紐の連きか換りまき小立ちる屏風  
の骨の間のさへ入まてその後へ懸まらうくして蒸波まの案内も  
せどまうと入る矢庭の松山が改髪を引廻し鍋とお砕くやうなる

声とまり立汝ほしるまばうくまて小膳の太き世小貧乏神と  
ものゆとりどその神体とあらざらまもゆかひバ汝いつか家の貧  
乏神ゆかありらるる容止も世の勝まそくス〜く加茂川の水も飲  
そく浴より賣うえ来まバ何事尋常にいあらとと思ひ候り  
驟の金の換くご小味とらつら小病ありそく客小ありき荒を  
そらざる猫の小味ととととと思ひく〜一氣と長ゆくゆと其  
せんやうとつら小味の多る人ゆり誠むと竭〜世渡つとを外する  
が憎ひまどその人の銭あるらゆひまや〜事をも忍びぬ既に錢  
竭ての仏とらとととつらるるまゆめあたらた況や預け〜稀なる財主  
めて身と償ひ故郷へ俱〜とらんと宜ハするハとらるる死使倅

さらしや速志をあらくもくその入身とまう生涯の計を  
 むしてゆめ損とせざればそのしんぶもさう多くて彼花主を  
 強面のくる一銭も死人の定と速くこまゆ損のうへる損とを  
 せよるま思ふのやゆらん虚氣とやゆらん實ふこが家の貧乏神と  
 わらなくして何ぞやうくてもまの銭も死人と思ひ終ぐりどく  
 回答よとのままたく罵辱る阿責の拳ふちより苦くも外  
 笑まん面目をさふ松山決と堰くわくこが俵の世とこころうら家  
 刀自らの腰くまうこが身くそのくら死目あわの覚悟のうまれ  
 ぞ碗久ぬくはまのく逢とやる契りあわらぬ推きより結号  
 夫へころ節操ぎふりひとくよもまぐ入折らるる牆の花身

のる是よめいせいさうんまういひてまらせもゆめか眼を睨  
 脱跡りくる歯と切つとせつてのう放くぐく美さ顔るま鼓  
 の皮よりる厚くくの碗久あおこんでいひ記るまの結号夫ゆり迎  
 客あめいずりあして技女の親方の世とこころんあゆい憎し腹  
 だくといひはまきあらく罵つて把る政警を雄手に巻き左右  
 み打るへ又仰るに突倒せが絢るがてくよりの果く將棋倒あ  
 踏くは屏風の上の薄びうらるる内にくせ短刀に膳ぐまうつらえ  
 阿呀と魂消る声ととも流る鮮血の龍田川の貼繪のゆみ  
 色まうこり是いと驚く燕波まが假威の打擲毛を吹く火を  
 求一周章に碗久も忍びうね走り出てなび活つてまうく勤

松山若しげうる息を吐き死んと  
 思ひ定て夫の奴めつらぬれ家  
 刀自のまに果ぬる影の金小買  
 まるがら是彼首ゆくおのが障  
 世をかりしうへせめてこの罪滅  
 にはるるるが日来頼となる故郷子  
 安の觀世音母の像見の護身囊  
 指の宛めくぬれとむむとげぬ  
 安のつゆど碗久いむとゆくと壁の  
 掛る護身囊と搔とく松山が



額ふさ著戴するを燕婆々ハ  
 つくぐとんく不審や是ハ元ヒ  
 女児常花と有馬の入り賣  
 死久後守らせの人多くつたれ  
 さうけ紐と裏の裂ぬむえぬ  
 女児山ハあらうらうらあらしのま  
 やまて燈火近く引とて常  
 顔も今さら瞬もせびうら守り  
 老の臉ふくもらうね一涙の  
 松山ハ空の悲しくて



女児常花と宣ひしは。その母は在せしが推して置られたる。  
 ひと家ありて。回しよ。いと親の恥とありて。  
 本貫も定らぬ。悔し。伊勢國椋本の郷八服部  
 浦多かひとり女児小名に常花母の名に忘井と名をひし。受  
 もぬ。無婆といま。驚き。忘井なる女児。て  
 あり。いと親と子。別の悪因縁。持し。て  
 まも。松山の。苦痛。堪。く。く。く。碗久頼  
 に嘆息。死後。愁。哀。松山。く。  
 つく縁故。説。昔松山。常花。有馬の湯本。ゆ  
 め。父。彼。湯治。父。戯。め。

二首の古哥と字。常花。嫁。せん。と契約。ひ。り。  
 その短冊。い。常花。を。実。と。意。  
 許。妬婦。怨。深。憎。崇。程。主人。藤。松。怒。死  
 怖。常花。越路。く。賣。く。も。く。て。父  
 あ。有馬。赴。彼。女子。と訪。ひ。あ。く。の。夏。よ。と。  
 め。今。往。方。も。あ。い。ら。及。び。立。腹。り。の。途  
 中。故。ゆ。主君。殿。の。兵士。と。の。忽。地。父。を。討。家。會  
 討。走。向。く。と。死。若。黨。田。井。八。太郎。と。い。もの。に。諫。め。られ  
 て。故。御。と。立。退。ま。この。浪。速。の。漂。泊。て。乳。母。の。野。崎。と。い。の。の  
 に。限。會。て。假。初。め。その。家。を。継。え。ら。ず。も。常。花。が。松。山。と。名。告。つ。を。

ぐにわの逢へる。年来の苦節を度ふ痛ましく。又根引甚と  
 り客あつた。至つて。いづれも。思ひ屈へ。他人の伴はせど。  
 伴まじと誓ひ。金そののね。いふまじ。養母の。を。人  
 空しく。今宵一畏の金と恵ひ。程ふ。と。懐う。と。道ゆ  
 盗賊の。路ゆく。人の助を。辛く。と。到る。聞  
 ま。金ゆ。その客。鉄具。不審。限。れど。  
 人を疑ん。罪。思ひ。松山を刺。と。死ん。と。つ  
 所へ。家刀。自の。刃。と。鞋。納る。道。の。屏  
 風の。骨。の。間。に。入。て。短刀。松山。命。を。預。す。と。  
 正。是。今。月。今日。歟。難。に。く。前。世。の。因果。り。る。ゆ。ゆ。と。

も。や。一。最。期。と。一。五。十。と。物。づ。こ。燕。婆。の。伎。毎。胸。を  
 ぐ。て。声。を。ひ。こ。て。さ。り。落。方。決。の。際。團。平。が。奸。計。め。女。児  
 を。賣。ら。し。二。人。の。支。黨。と。殺。て。送。電。せ。し。た。め。ゆ。り。その。身。も  
 伊。勢。の。住。ひ。の。懶。く。て。故。郷。を。迷。ひ。出。し。死。有。馬。に。赴。き。て。常。花。と  
 訪。ん。思。ひ。い。う。ど。を。思。う。よ。り。謀。ら。ま。く。女。児。を。賣。ら。し。  
 由。は。く。わ。ん。も。面。目。を。と。ま。平。が。に。耻。と。立。ま。ら。ざ。り。し。よ。り。を  
 伎。を。あ。ら。し。又。い。ま。う。さ。ら。よ。る。死。身。ひ。ら。に。親。族。も。あ。津  
 小。流。を。渡。つ。もの。乞。食。し。て。法。名。清。春。尼。と。な。ま。し。が。彼。此。人。の。情。ふ  
 て。遂。に。花。街。の。牙。波。女。と。り。る。不。意。僥。倖。あり。て。と。女。妓。院。を。開  
 き。後。有。馬。に。赴。き。女。児。を。訪。ふ。と。そ。の。往。方。い。ま。ま。び。空。く

駭の年月とて一つ思ひかうり。彼の子安の観音堂を造りうえ  
 前の夫が有り。世の病願を果し。女児小逢。あつらく思ひを  
 欲の發願ゆくとお抜ぐ人の子に。ころみく銭と遣りて親小追  
 是家とて。あひ路頭。お立ちゆかひも。あつた。銭あるうら。神子敬ひ  
 銭尽れば。餓鬼より。請避。とて。うら。廿。積貯。その金の殖よ  
 せ。女思ひ。まら。ば。毎日。て。お。虚過。の。り。ひ。あ。ら。う。ま  
 け。殺す。子。ゆ。多。く。迷。り。く。罪。と。ま。す。浮世の親の見懲。い  
 る。ひ。ゆる。直。仏。の。方。便。ゆ。め。の。り。なる。よう。子。ま。も。ゆ。ら。ね。忘。井。が  
 今。こ。と。う。く。の。老。骸。て。乾。蕪。ま。も。な。ぶ。る。る。ま。じ。も。昔。の。河。竹。の  
 色。と。鞠。ぎ。媚。と。賣。り。と。む。く。その。嫖。客。を。詭。さ。し。る。悪。報。ゆ。て。後

の夫小謀らま。女児も。あ。る。頼。小。と。破。ら。ぬ。操。小。身。と。喪。の  
 面目も。あ。た。蕪。波。ま。が。懺。悔。ゆ。造。り。罪。も。あ。る。せ。の。人。觀。世。音。南  
 無。阿。彌。陀。仏。と。唱。つ。鮮。血。ま。る。松。山。が。短。刀。と。と。り。や。め。く。胸。さ  
 う。く。突。く。ま。ば。襖。を。開。て。客。房。の。内。ゆ。も。咬。ゆ。苦。痛。の。一。声。と。何  
 ぞ。と。て。碗。久。が。と。と。彼。野。小。身。ひ。う。と。と。た。う。ね。て。走。り。る。襖。を。裡。り  
 こと。用。き。刀。引。提。て。立。出。る。松。山。が。根。引。の。客。碗。久。と。と。と。小。藤。を。屈。め。た  
 中。と。と。と。と。投。捨。ま。び。の。人。い。是。別。人。ま。ら。ず。若。黨。田。井。八。太。郎。と。あ。り  
 不。審。と。く。碗。久。が。い。く。怪。し。び。襖。の。こ。ろ。へ。坐。行。出。る。野。藤。と。り  
 懷。鈕。咽。喉。ふ。つ。ら。ぬ。ま。ま。と。未。小。染。る。形。容。は。是。彼。驚。痛。し。り。や  
 敷。と。の。袖。の。雨。降。と。漏。る。周。章。に。野。崎。ハ。細。き。声。を。励。し。か。推。子。は

身大直と思ひのこぼれ。松山どの懐胎と露なるもあつたべらふ。  
 のめる日兒子八太郎の天満はくやがりのひ。あつ仔細あまのり家  
 ハ伴いぶるわうく。潜せおかく密にこまを談合し。りつめし。松  
 山どのを引くもち古主の飯茶さ。進らせんと思ひ。うが家とま  
 籠とま質を。てあつびやう小金をその。さそ八太郎と旅客にあ  
 扮して賊夥のてるあつらさ。松山どの入らう。て猛小身價の  
 をりせ。又今宵一果の金ありと偽ると。賣残つ。る漆器のその  
 鉄具と進らせ。この故小松山どの小疎と。奪が。ひの路  
 を断舊の武士の立ち入り家と。奥し。り。と計り。古き仇と  
 る。今將思へ。浅ま。や只一言の戯と。実と。せ。その人の多に。千

万無量の辛苦と稟せやくやぐり。大政の廓小稀ある。負女の鑑誠  
 がぞりく有身しを引くも。さんそ。計較し。鬼と。あつらさ。か  
 あ。く。と。せ。ぬ。う。の。神。心。と。と。あり。の。甲。夜。ゆ。庭。小。立。願。ま。  
 更。と。襖。の。こ。ら。こ。ゆ。く。一。五。十。と。使。け。り。眞。土。小。ま。ま。宗。達。と。る。  
 夫。久。右。王。門。へ。面。る。と。あ。と。そ。ぞ。又。伏。け。る。ひ。ふ。く。る。の。見。子。が。ら。不。便。  
 を。加。え。る。ひ。ね。と。り。の。声。も。と。え。づ。る。り。八。太。郎。の。母。が。自。殺。の。敷。行。の。涙。  
 を。押。う。ね。碗。久。が。る。と。り。近。く。額。つ。ま。と。く。ま。う。す。か。う。恙。な。く。在。す。る。  
 る。の。母。の。物。が。ご。り。ゆ。く。安。堵。せ。り。抑。僕。白。米。の。城。中。に。と。討。合。の。兵。  
 を。切。脱。君。小。追。着。を。ら。ん。と。せ。し。が。その。行。方。を。あ。く。す。む。ら。ら。す。も。近。  
 江。の。山。里。の。羊。を。越。く。つ。ら。く。と。り。先。君。猛。小。討。合。の。ひ。一。縁。故。



定くるらずとりのいも鳥屋尾七郎二こと疑いんは彼がらりゆれ  
を窺ひ事おのづからあつくりもわらんりきく潜し伊勢國に  
赴き外らぐらそのころの為体と安く先君枉死あひいへ八姫婦  
か宗とて露むりも罪なきり分明るにようそ大言あのみとて後  
悔あつて鳥屋尾氏に命ぜらる君の行方と索さるあのみとてと  
ゆつてか母頼つ小松山あのみとせし思ひゆりもして引せま  
君と勢及ぬ飯しあのみとせし謀りしあのみとて僕にる君よ  
索あひをらんる小諸國と編笠し近曾浪速あのみとてとらりも  
母に環會とゆいども別旅宿と求やく潜び居るるあのみとて母が  
やせしとてあのみとて今夜長堀ゆく君盜賊あのみとて難美あのみ

折しも僕あつくりと月の高りし小紛らひ外きく助力あ  
ゆらせとての盜賊と縛ゆらふら母も又今宵の首尾とて  
ゆらとて思ひゆりもにまらしその賊とてとてあのみとて家の  
主管直六といひあのみとてゆりてとてあのみとてあのみとて  
貴問あ彼が隠匿審あ白状せりさるあのみとて這奴とて長櫃あ入  
まらとて小早しあのみとて歌妓女の童あのみとてあのみとて  
母あ庭の木蔭あ潜しあのみとて是見あのみとて長櫃の蓋と返退頂  
髪廻り引出せは直六あひとて縛あら口あのみとて拭とせませられ  
長櫃の裏あのみとて妻子の物あのみとてあのみとてあのみとて  
面あのみとてあのみとてあのみとてあのみとてあのみとて



松山  
横死  
の  
ごころ



家を買ふて主君とありてあるおのい罵り刺今宵の拳動言語  
 に終る癖者なり今こそ思ひあらせんといひ死まきつ刀を抜と  
 斬んとて燕婆のいこまことん苦いげある声と揚中へあぐ待  
 のくそまこと松山が親父にうらが為ゆ後の夫あり一團平と呼  
 まてろのり悪入るまでと面ありその人と殺さまんの黄泉  
 の隙ふと命ハ助めうと勧解るに松山もや眼をひらき  
 ののりまねるをてあへ命をす孝ひふ八太郎も撃ちなう  
 碗之をばく歎息して夏より身身の恨より松山親子非命に  
 死し母も思ひ野崎へ自殺して矢ぬるふ又松山は由縁ある團  
 平の直六を殺しるバ人の罪のと責く己が非とあらざるに似る

誤せとととびまて燕婆のい歎いして苦痛も忘まて是れ  
 正笑と人と虚身と亡すも金のと悟るとは石瓦にも  
 等しきと泣き下さく梓弓案山子に似る老の身の境を死腰  
 小煙ひする賤布も重き罪障と思ひ己が仇あり今の中へ  
 身にまはるるも思ひして腰の巻るる勝手賤布とて投  
 捨るば飛散る黄金ハ茶華花の井壇の玉水流るごとく或ハ十  
 枚二十枚ひらりととて毒とて毒と形容彷彿と金色の蛇をんえ  
 て彼此とく蹴繞るがふ世の人の恨と迷せ禍媒の賤眼前  
 輪回と示すぞあそろしき碗久ハいふとんく無常を觀  
 るん八太郎が刀ととらと吐と切らんとするを八太郎吐嗟とてそのま

携てややくふ引由は野崎の因る眼を見ひら死推子を殺す程よりバ身自殺しけらるるもの老女と松山どのを殺せらるる波多のよりひこく係累とさせしめらるる見せしめひ送せしに大死とさせしめらるる声もむとつ。松山も又息の下に今死る身と存命と後の世吊てらるる千僧の回向ゆもまた嬉しくはらめと自害とせしむる末期の一向も啣くまきつ。死すも死すも死すも死すも哀傷殊ありやまきつ。八太郎も方る死悲歎と思ひて碗久小對ひ園宅の男女熟睡してしまつ。あつらふこと幸多しとよ直の故御へ飯もゆつと忠孝両方全しめらん夏願いしくいと諫まは碗久ハ改とら掉父の罪も

より望えくつら本意も何の面目めつと何容くと取仕入へまきも捨てる身もまげそ無何有の御は握りまきつ。いとひもとららか。あて刀ととらるや。髻帯と剪すられバ八太郎の諫うねくややくふ立あがり。松山どの母子は母の菩提の為放生會悪び死ひるがへ造りて罪と滅せしめひ論つて直六が縛の索切をらひ。縁より下へ衝落せバ立一ねもきり逃去ぬ助けらまてその人より蕪波も喜しけらるる塔の拜ひも世の美理よりらまらる薜蘿ののり葉も枯まて座る死松山が浅黄縮緬茶縮緬寐衣と死出の旅衣最期ハある。嫁姑短き夢の世の中は明行春の曙山三人ひる。き草もくら花の街も嵐も

日ひいめりるる西にしの空そら教をえくく之をや阿弥陀仏あみだぶつと唱なめて飯いる碗わん久くを  
後のちにぞ唄うた入い物もの狂くるひを擬な君きみ狂くるひをの教を誠まこととく聞き入い耳みみと側そばるるべし。

作者曰しやうしやくのいふ  
只識者ただしやくしやの唾笑つばわらを羞は是こゝ予われ得意とくいの作文さくぶんゆらち。実に已上いじやうを得えられし。

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

柳巷話説卷之四 終

